



「七ヶ月の回顧」

2025 年 12 月
清教学園中・高等学校
初代校長 植田 真一
(1896～1989)

人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。
草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。

(ペテロの手紙 一 Ⅰ章 24～25 節)

長野のような田舎町に、随分風がわりな学校が出来た。一体どの位の生徒が集まるであろうか。余っ程物好きな親でない限り、大事な子供を預ける人はあまり多くないであろう。どんな教育をしてくれるのか一切が白紙同然の学校へうっかりやろうものなら、それは大事な子供を試験台に乗せると同様である。そんな危険を冒してまでもやらねばならないという義理あいもあるわけではないし、また一応情勢を觀望してからといったような空気が、この四月開校当時の本校に対する世間様の極めて怜悯な批評ではなかったであろうか。

ところが蓋をあけると五十一名の子供が集まって来た。なんとこれは意外な出来事である。奇跡でもあった。私はこの五十一名の子供たちの顔をみた時、初めて神さまの偉大なる御摂理を感謝した。と同時に、どんな教育をしてくれるのか全くの未知の世界に大事な子供を託して下さった親たちに対して、心の底から「ありがとう」と叫ばずにはいられなかった。私たちのような微力なものの集まりの中に子供の前途を賭けて下さった親たちの冒険に対して、何をおいても報いねばならないという覚悟を固くしたのであった。

爾来七ヶ月、私たちの歩んで来た道は決して平坦なものではなかった。

四月の花が咲いて散り、目にしみ入るような若葉の色香も、所詮は私にとって愛するにかなう暇もなかった。ここ二、三日めっきり少なくなった柿紅葉の姿を見るにつけ、漸く秋の深まったことに気がつく位あわただしい七ヶ月であった。

あれもなければこれもない。ないものづくしの新設学校のうら淋しさをしみじみと味わったことであった。

それのみならず、全く予期しなかったような困難な問題が次々とわきおこって来て、小さな私のたましいをさいなまずにはおかなかった。

学園の前途に色々な悪魔が色々な形をかえて暗い影を投げずにはおかなかった。

私は幾度か深い溜息をついた。神さまに祈った。真夜中にそっと寢床を抜け出して、かどさきの露にぬれた石の上に腰を下ろして溜息をついたことも一再ではなかった。無心に眠っている草木にすら羨ましいとまで思ったことさえあった。



時には、私は絶望感にさえ襲われたようなことがないではなかった。
しかし私は、すぐに私の心の奥底で、私の良心のささやきを聞いた。
それは、この大事な五十一の魂を託してくださった神さまと親たちに対してまことに申しわけがないということであった。

八月のある日、私は六甲山の山の家で一日一晩考え続け祈り続けた。
山の秋は早い。八月中ごろと言うのに草むらに萩の花が咲いていた。秋の虫がすだいていた。
私はその草むらの中で考えた。虫と共に泣いた。
私は寂然としてあたりを諦視し天を仰いで祈った。
それは、託された五十一の魂をよりよく育てより立派なものにするにふさわしい力を私に与え給え、と。

顧みれば短い七ヶ月ではあったが、私にとってはあまりに峻しい山坂であり、また深い溪谷であった。

文化祭を前にして子供たちは次第に落ちついてきた。だんだんよくなりつつある。子供たちは、もうめったに私たちの手からは離れないであろう。祈りに応え給う神さまを私は信じ切っている。今日教えたことが明日間にあうような教育は教育の邪道である。五年さき十年さき、二十年の将来にこの五十一の生徒のなかからどんな人材が現れるか。それは神さまのみが御存知のことであって、私はただひたむきに祈り続けねばならない。そして子供たちの一日一日伸びて行く姿を見守らねばならない。そうでなければ、大事な子供を託してくださった神さまと親たちに対して申しわけがたたない。

(1951 年 10 月「学園新聞」文化祭号より：『主の言葉はとこしえに残る』(1990 年刊) 所収)

*今回は、2026 年に創立 75 周年を迎えるにあたり、清教学園の始まりの夢を覚えなおす機会を持つことにさせていただきました。初代校長としての重い責任を担った植田真一先生の文章からは、清教学園という学び舎に顕現する<日々の苦悩>と<信仰に基づく希望>がありのままに感じ取られる思いがします。さまざまに苦悩があろうとも、ひたすらに祈り続けながら子供たちの将来を拓く教育に専心することで「子供たちは次第に落ちついてきた。だんだんよくなりつつある。」という手ごたえを日を追うごとに実感させていただいている——そのような毎日こそが昔も今も変わらぬ清教学園の姿です。「神様の前で心から祈る信仰」のもとに「目を世界に向けて、どこに出てもはずかしくない、どこに行っても信頼される人間」を育てることに自らの使命を担う清教学園は、創立以来ずっと、「生徒が看板」と述べ続けられる教育をしているのかということに存在意義が見いだされるべき学校なのです。

(法人事務局)